
夢見る少女と凡人

ふくろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る少女と凡人

【Nコード】

N3507W

【作者名】

ふくろう

【あらすじ】

凡人であり、凡人であることに誇りを持つ少年と、特殊な夢を見る少女の物語。

序章と導入（前書き）

勢いで書いたものです。続きを書くかは未定です。
よろしければご感想を下さい。お願い致します。

序章と導入

空から女の子が降ってきた。

某有名映画監督の天空の城アニメを知っているだろうか。目の前にある光景を認識したときに俺が真っ先に思い浮かんだのはその映画のことだった。

目に写る光景はスローモーションで、手も足も伸ばした状態で背中から落下する少女は、まるで現実味のない存在だった。

しかし現実だった。

急に時間が元の速度に戻り、あっさりと少女は川の中に、吸い込まれる、いや、叩きつけられた。

激しい水飛沫がこちらまで飛んで来て、俺の顔に掛かる。そこで俺はこれが現実のことだと認識し、酷く狼狽する。全身から冷や汗が吹き出てくるのを感じた。まさに冷水をかけられたような、実際に掛かった顔以外にも濡れ、風が吹く度に俺の体温を奪うのを感じていた。

正気戻った俺は周りを見渡した。しかし残念ながら、親方どころか人っ子一人いない、このままではあの子は溺れてしまう。

川から女の子が出てくるよう子はない。水面は先ほどの飛び込みの衝撃で揺れるばかりである。

さっきまで流していた涙も、既に完全に止まっていた。

変わりに溢れ出てきたのは、どうしようもない焦燥と恐怖だった。

俺はいてもたってもいられず、川に向かって走り出した。

『新人生へ送る進路選択のアドバイス』

斑目陣

生徒相談部

誰もが、人生という物語の主役である。という言葉をも、俺は聞いたことがある。

なるほど、確かに人間は主観で生きている以上、一人一人が、自分の人生の主役なのだろう。一見前向きな言葉だ。しかし、それは決して救いのある言葉ではない。これは現状に不満を抱いている者にとっては「これがお前の人生だ」と突き付けられるようなものだからだ。

新人生諸君も今までの、短くも、よう々な経験をした人生のなかで、現実という教師から自分が『平凡』な存在であるという事実を教えられた者は多いだろう。絶望し、悔しかっただろう。しかしどうか嘆かないで欲しい。

むしろ、俺はそんな君たちに、おめでとう、と言いたいのだ。

自分が凡人だと知ることとは、とても大切なことだ。

考えてみてくれ。何故君達は『普通』というのが嫌なのか。

個性がないことが、世間でまるで悪いことのように言われるのか。

ありふれていてつまらない？ 誰とも違う特別な存在でいたいから？

しかしながら社会というのはありふれた存在で形成されている。普通の家族、普通の学校、普通の職場、普通の暮らしだ。

その中で特別な存在であることが果たして幸せだと言えるのだろうか。俺は思わない。

特別な存在は孤独である。良くも悪くも他人とは対等にはなれないのだ。特別同士なら別かもしれないが、そもそも中々存在しないから特別なのである。

そして人間はウサギ顔負けの、孤独に弱い生き物だ。孤独であれば生きる意義さえ見失うのも珍しいことではない。死ぬまでいかなくとも、活き活き、とはいかないだろう。

何かを得れば、何かを失うのである。

どこかが突出すれば、他はへこんでしまうのだ。

確かに人より優れた能力には魅力があるかもしれない。それは分かる。

しかしながら、残酷なことを言うようだが、君達の多くは特別な存在なんかではない。本来ならそんなことを考える必要もない。

平凡で、普通の人間だ。

もちろん俺も普通の人間だ。凡人で、何の才能もない存在である。

だから君達も夢を見ず、現実を見て欲しいと俺は思う。

自分の身の丈に合った将来の選択をして欲しい。

高望みはいけない。僅かな可能性に賭けたりしてはいけない。

それを踏まえた上で、新入生諸君に進路選択をへのアドバイスを送ろうと思う。

サラリーマンならなんでもいい。

安定した収入のある職業を選べばそれだけでOKだ。仕事の内容なんてどうでもいい。むしろ嫌いな職業を選んだ方が妙な夢を見ないで済むのでオススメだ。

以上、上級生から新入生に送る進路選択のアドバイス終了。

するな高望み！ 見据えろ現実！ 愛せ平凡！ イエーイ！

「却下だ」

俺の一時間を掛けて書き上げた、新入生向け冊子の進路相談コラムに載せる文章が、一刀のもとに切り捨てられる。

捨てたのは、我が校の生徒会長、九鳳院燕だ。高級感溢れる名前に負けない、麗しく、高校生離れした美貌の持ち主だ。モデル顔負けの長身と、メリハリのある体は、校則一切破らない制服に包まれながらも、自己の存在を強烈に主張していた。

しかし九鳳院先輩を見たときに一番印象に残るのは、おそらくその眼だろう。鋭く、全てを見透かすようなその眼には、到底自分と同じものが嵌め込まれているようには見えない魔力がある。

そんな神様が本気を出して作った的な容姿は、男子生徒の視線ばかりか、女子の羨望の眼差しすらも一人占めにする。まさにカリスマ生徒会長である。しかもその上、有名財閥の令嬢ときたもんだ。神様の不平等さには呆れすら感じる。とても同じ人間とは思えない。

「何故ですか!？」

俺は体の内より湧き上がる不満を堪えきれず叫んだ。

「夢がなさ過ぎだ」

九鳳院先輩は机の上で手を組んだ姿勢のまま、その眼力の半端ない眼で俺を見据える。

「夢なんか見るな、と俺は訴えているんです」

「現実を見るというのは間違っていない、しかし夢を見るなというのは言い過ぎだ。まだ高校生、しかも入学したての一年生なんだからもっと自分の可能性を模索してもいいだろう」

「そんな中途半端に夢を見させるから、挫折する者が増えるんですよ」

「成長に挫折は付き物だ。失敗が、人間を成長させる」

「そんな言葉が適用されるのは才能ある人間だけです。多くの人間は挫折から立ち上がるなんてできない」

「そんなのはやってみなければ分からない。大体なんでお前が書いているんだ。私は部長の日下部辰巳に頼んだはずだ。それに最後の

イエーイってなんだ」

「それはちょっとテンション上がっちゃって。辰兄は相談の依頼が入ったから、そっちに行ってます」

「いつもの人助け病か」

書類を置き、悩ましげに溜息をつく神崎、なんでも絵になるなこの人。

「いつもながらアイツはどうしてそんなに人の為に頑張れるのだろうな」

「九鳳院先輩だって似たようなものでしょう？ 生徒の為に、日々生徒会長の仕事に追われてるじゃないですか」

俺は机の上に積まれている書類の山を見た。そこにはとても一人で処理できるとは思えない量の書類が、沢山重ねたら木に戻るの？と言わんばかりの勢いで高く積まれていた。

「そう、私の仕事だ。みんなに選ばれた責任がある」

「責任ですか、そんな重いものよく背負えますね」

「鍛えているからな」

「成程、日頃の訓練の賜物ですね」

「だがアイツのは趣味だろう？ さっぱり理解できない」

「人それぞれってことですよ。俺には生徒会長なんて責任背負ってる、九鳳院先輩の方が理解できませんよ」

「ん？ そうなのか」

「ええ、俺は非力ですし、運動不足ですし、ヘルニア予備軍ですのでもんな重いもの背負ったら、すぐにペシャンコになりそうです」

「そうかな、私は君がそんな弱い人間には見えない。磨けば光るタイルかも知れないな、責任のある立場に立てば、認識も変わるんじゃないか？」

「やめて下さいよ、俺は責任なんてまっぴらご免ですし、どこにでもある凡人です」

俺はヘラヘラ笑いながら、できるだけ軽薄に、続きの言葉を口にする。

「だから俺に、期待なんてしないで下さい」

日常と非日常

生徒相談部の部長である日下部辰巳が変人を連れてくるのは珍しいことではない。

俺の幼馴染であり、一学年上の辰兄は昔から面倒見のいい兄貴分として名を馳せていた。そんな性分は現在も成長する逞しい肉体と同期するように膨れ上がり、いまや人助け中毒ともいえるまでに成長していた。彼は常に人の悩み事を見つけ、解決に導くことを生きがいとしている。そんな彼が作りだしたのが俺、斑目陣が籍を置くこの「生徒相談部」、略して生相部である。

セイソウ部などという言い方をすると、まるで掃除をする部活のようだが、実際そういう部活だと勘違い生徒もいるのだが、活動内容は一つ、「生徒の悩みを聞き、解決」である。まあボランティア活動という意味では同じようなもんだと言えなくもない、キレイにするのが町か人の心かの違い、みたいなもんかな、うん、そんなにうまくないな。ごめん。

籍を置いている、とはいったが俺はこの部に入部してから生相部としての活動をほとんど行っていない。俺が手伝わずとも部長である辰巳がすべて解決してしまうからである。俺は別にダラダラする空間が欲しいだけなので、それで何の問題もない。たまに暇つぶしがてら参加したりもするけど。

今、部室にいる日下部燐も俺と同じような理由でこの部活に参加している。

燐は辰兄の妹で、辰兄と同じく俺の幼馴染だ。家が隣であり、生まれた日まで近いので両親同士は俺達と一緒に遊ばせ、物心ついたときには隣にいた存在だ。

癖のない、長い黒髪にフチなし眼鏡、涼しげな顔立ちも相まってその印象は非常に知的だ。実際彼女は学年トップの成績の持ち主で、勉強は勿論、専門知識、雑学に至るまでありとあらゆる知識を

持っている。しかし、それは彼女の病気とも言える習慣の副産物に過ぎない。

燐は読書中毒患者である。常に本を持ち歩き、通学中、授業中、食事中、風呂に至るまで読書が続けるある意味変態だ。読む本の種類はよう々で、専門書、小説、ゲームの攻略本までなんでもござれだ。きっと本の名の付くものは全部読むつもりなのだろう。

燐がこの部に在籍する理由は、校内で落ち着いて本を読める場所が欲しいからだ。俺と同じようなものだ。

生相部は俺を入れて以上の三名が在籍している。辰兄は部員最低人数を確保する為に俺達を入部させたので誰も損をしない、理想の部活である。駄目人間の理想郷とも言える。俺と燐は今日も、それぞれの時間の潰し方をするだけだ。

だから辰兄が依頼人である少女を連れてきたときも、「辰兄が解決するので関係ないな」、と思っていた。のだが、今回は少し違うようだった。

「1年F組、相川つぐみです！ よろしくです！」

と部室に入ったとたん勢いよく頭を下げ挨拶をしてきた少女、学年は一つ下の一年生のようだ。この学校は上履きの色で学年が区別されていて、三年の辰兄は赤、二年の俺や燐は青、そして目の前のこの少女の上履きは一年を表す緑だった。続いて顔を上げた少女の顔を見る。大きな瞳が印象的で、その目を見るだけで快活な性格であることが窺える、短く切り揃えられた細い髪や、口元から覗く八重歯も、彼女が活動的な人間である印象を強めていた。

「あー！ この人ですよ部長さん！ わたしの唇奪った人！」

こちらをビシッと指差しながら辰兄に報告する初対面の女子に、聞き捨てならないことを言われた。

改めて相川つぐみ、と名乗った少女を見る。うん、やっぱり知らない。

横から燐がまるで性犯罪者を見るような目で俺を見ているが、まったく身に覚えが無いので勘弁して欲しい。

改めて見る。

爛々とした瞳が俺を見つめる。

その女子の表情とは裏腹に、俺は自分の表情が一気に暗くなるのを感じた。

良く分からないが。分かったことが一つある。

俺の愛する平凡で平和な日常は、今日はお休みのようだっ

聞きたいことは山程あったが、まずは名乗られたからには自己紹介をせねばならない。俺は常識を弁えた人間なのだ。

「俺は2年の斑目陣だ。で、こっちの俺を犯罪者を見るような目で見てるやつは日下部憐だ」

「先輩達は付き合ってるんですか？」

初対面の癖にプライベートな質問をグイグイしてきた。最近の女子高生はみんなこうなのか？

「いや、ただの幼馴染だ」

「そうですかっ！ よかったですっ」

ニコニコと話す相川。なにがよかったんだ？

「で、お前はなんなんだ」

早速俺は質問する。コイツがなんなのか全く分からない。

すると、その少女は控えめな胸に反するような堂々とした態度（失礼）で次のような発言をした。

「私は予知能力者なのです！」

ジャーンとでも効果音が出そうな勢いで告白する少女。

……えーと、質問間違えたかな？

予想の斜め上をいく回答に俺は動揺を隠せなかった。

いや、もしかして初対面でいきなり突飛な発言をして、場を和ませよとしているのかもしれない。さすが女子高生、場の空気を壊すとKYと蔑まれる世界で食った食われたの日々を生き抜いている

だけはある。

だとすれば先輩である俺もそれに付き合っただけなのが礼儀だろう。俺だって普通の人間代表。場を空気を読んだユーモアには自信がある。

さっきの相川の発言に対抗する形で、嘘のカミングアウト形式にしようという。

「俺は目隠しされてる女の子に、非常に興奮するぞ」

あれ？ 思わず本当の性癖を告白しちゃった。

「いきなり何言い出すの、このド変態は」

幼馴染からゴミを見るような目で見られた。

人を蔑む視線で結構バリエーションあるんだね。

「先輩、そういうアブノーマルなのはわたしちよつと……」

初対面の女子の後輩にドン引きされた。

なんだよ、お前が作り出した空気だろ？

「いや、お前なに引いてんだよ。お前も十分引かれるようなこと言ってるぞ」

「わたしは事実を言っただけです」

「お前はアレか、不思議ちゃんって奴か。そういうキャラ作りなのか」

「本当なんですって」

「畜生、俺はあんなカミングアウトして白い目で見られてるっていうのに、お前は全然本当のことを言ってくれないんだな」

「それは先輩の事項自得です。それにわたしの言ってることは全部本当ですって」

「……で、相川の相談はなんなんだ」

「おおっ、びっくりするくら無理やり話変えましたね」

「実はだな、相川の悩みはもう解決したんだ」

事情を事前に聞いていたらしい辰兄が代わりに説明を始めた。

「相川はさっき言ったように予知能力者なのだが――」

「ちょっと待て、その前提条件で話を進めるのか」

「本人が言っているのだからそうなのだろう？」

何を言っているんだという顔を俺を見つめる辰兄。

辰兄は人の言うことを無条件で信じるところがある。それは辰兄の長所でもあり、短所でもある。この場合は後者だ。

「辰兄、落ち着けて。この自称不思議ちゃんに言うことを」

「先輩先輩、つぐみですって」

「このつぐみの……ってなにさりげなく下の名前で呼ばせてるんだ！」

「やだなー、先輩とわたしの仲じゃないですか」

残念ながら初対面の女子と、ファーストネームで呼び合う風習は俺の地区にはない。

「兄さん何を馬鹿なことを言っているの？ 予知能力なんているわけじゃないじゃない」

俺を地面に這う虫けらのような目で見ることに飽きたのか、本に目を落としたまま兄に指摘する燐。おおさすが学年一の秀才「この眼鏡に写るものしか信じないわ」が持論だけはある（嘘）。

「彼女がキチ○イなだけでしょ？」

「お前は言い方をもうちょっと考えようか！」

過剰表現は規制の対象になるので控えよう。

「で、その予知能力者の相川が言うにはだな」

辰兄が俺と燐の発言を聞いているのか、いないのか、相変わらずのマイペースぶりで話し始める。

「相川は夢で未来を見ることができるといいのだが、その夢で男子とキスをしている夢を見たらいいんだ、そのキスの相手を見つけて欲しいというのが相川の依頼だったんだが――」

「えへへー、その相手、『運命のひと』が先輩だったんですよう」
くねくねしながら辰兄につなげる相川。いやちょっと待て。

「もし仮に、お前にそんな夢を見たとして」

「見たんですってば」

「なんでそれで『運命の人』になる」

「わたし将来結婚する人は初キスの人って決めてたんですよ」

「そんな願望は知らないっ！ それについてようににそんな初キスのカミングアウトをするな！」

なんで初対面の女子にいきなり婚約迫られないといけないんだ。こいつ結構可愛いけどさ、いやいや。

「ひどい……、唇奪っておいて」

傷ついた瞳でこっちを見る相川、そんな彼女のように子に俺の心はズキッと痛み——いや待て。

「それは夢の話だろうっ！ 俺は何もしてない！ そんなオイシイ思いはしてない！」

そう俺はキスなんてしてない、したこともない。リア充になりた

い。

「落ち着け陣、これからの話だろう？」

「だろう、じゃないよ！ なんでこれからの俺の唇事情をこんなとこで話さないといけないんだ！」

どんな手馴れたヤツだ、俳優か？ 俺はプロの俳優なのか？

「鏡を見て陣、あなたに俳優は無理よ」

「心を読むな隣、お前は超能力者か！」

「超能力なんてなくても分かるわよ、幼馴染なんだから」

本を読みながら答える隣、その表情はいつもと変わらず無表情だったが、心なしかその声は不機嫌な感じがした。

「初対面の可愛い女子に好意を寄せられて調子に乗ってる、顔がにやけた幼馴染に、己の姿を再認識させて正気に戻してあげただけよ」

「だからもうちょっとオブラートに包もうか！」

たった一文のなかで言葉のナイフが何本も刺さったよ。俺のライフがガリガリ削られている音がする。何故だ、何故ここまで攻撃されなければならないんだ。

「きゃー！ 可愛いなんて！」

相川が可愛い後輩と言われて照れていた。そこに反応するのかよ、どうでもいいよ、それよりフォローしろ。先輩はカッコいいですよ、とか言えよ。

「いや、わたし嘘つくの苦手なんです」

「お前もエスパーか！ 人の心読めるのかっ！」

心を読むな、プライバシーはどこいった。

「いや、エスパーですけど予知能力者ですって、先輩おバカさんですネ」

「わー、不思議ちゃんにバカ呼ばわりされたよー」

「まあまあ、その辺しとけお前達」

辰兄が脱線しかけた話を戻す。

「という訳で、相川の相談は陣に会った時点で解決したんだ。見た目の特徴を聞いた時点でお前じゃないかと思っていたんだが見事ビンゴだったようだな」

辰兄は満足そうな顔で頷く。

「特徴って、どんな風に聞いたんだよ」

俺はちよつと気になって聞いた。「影のある知的な青年」とかだろうか、この場合自己の評価を『普通』から『ややイケメン』に上方修正する必要があるかもな。普通を愛する人間として、普通より上の存在になるのは複雑だが、客観的事実を受け止めるの大切なことだ。

「顔は普通よりやや下だが、カッコいい雰囲気を出そうとしている人、だ」

強制下方修正された。しかも顔から火のするような追撃までもらった。

「っていうかなんでそんなヤツとキスする夢見てんだよ！」

自分で言っただけで悲しい、しかし言わずにはいけない。

「いや、だって予知夢ですから？」

仕方ないじゃないですかー、とヘラヘラしながら答える相川。

「でもわたし、先輩の顔好きですよ？」

にっこり、と柔らかい微笑みを浮かべ、相川はそう言った。……
やばい、ちよっとドキッとした。

「うちの犬に似てるんで」

「俺のトキメキを返せ！」

「だから結婚を前提に付き合ってくださいっ！」

片手を前に出して告白する相川。だからってなんだ、犬と結婚しろ。

「断る！」

二文字で拒絶する俺。

「なんでですかっ!？」

「色々あるけど、とりあえず重いんだよ！」

いきなり結婚とかさ、なんなのさ。

「先輩、飽きた女は捨てるタイプですね？　がっかりですよ」

「なんでそんなこと、お前に言われなきゃいけないんだ！」

「彼女だからですよ！」

「当たり前のように嘘をつくな！」

顔は可愛いけど、付き合うなら俺はもっと普通の、こう、花も恥らうような……

「陣、また身の程を自覚しないこと考えたでしょ」

「だからお前はエスパーク！」

隣は涼しい顔で本を読み続ける。なんで分かる。顔に出ているのか？

「落ち着け陣、それと相川」

辰兄が俺たちの間に立ち、相川に向かって諭すように話掛ける。

「確かにいきなり結婚前提で付き合うの非常識だ」

さすが辰兄、最後は俺の味方だと信じていたよ。

俺は兄弟のように育った辰兄に、改めて尊敬の念を抱き、兄弟の絆の存在を感じた。

「まずはお友達から始めよう」

始めよう、じゃねえよ。なに勝手に俺の友達決めてんだ。お前は

過保護なお母さんか。

「そうだ、この生相部に入ればいつでも陣といっしょにいられるぞ」
あんた部員増やしたいだけだろ。なにナイスアイディアみたいに
言ってるんだ。

それを聞いた相川はパアッと花が咲くように笑顔に変わり「ハイ
ハイっ、入部します！」片手をあげ、と元氣よく答えていた。

手早く用意された入部届けを受け取った相川は、喜色満面の笑
みを浮かべながら入部届けを抱くようにして持ち、こちらに振り
返った。

「これからよろしくお願いしますねっ、先輩っ」

「……ああ、後輩」

なんかもう疲れたので、俺は適当に頷く。

その笑顔に不覚にも、とっさに用意しようとした反対の言葉を忘
れてしまった、なんてことは、決してないのである。

依頼と証明

辰兄がその相談者を連れてきたのは午後の5時頃だった。

燐はいつも通り読書、俺はパラパラと漫画を捲り、相川は「えへへ、先輩」なんて寝言を言いながら気持ちよさそうに居眠りをしていた。

そんな退屈ながらも、ゆったりした時間を壊すように、勢いよくドアが開かれた。辰兄が満面の笑みを浮かべながらその相談者である生徒と共に部室に入ってくる。

「みんな、紹介しよう。吹奏楽部部長の水島だ」

そう言って辰兄が紹介した人は、長く柔らかそうな髪を、後ろで緩く束ねた大人しそうな印象の人だった。紹介を受け、ゆっくりと頭を下げる。

「吹奏楽部部長、3年C組の水島美羽です。よろしくお願いします」

「水島から相談は、最近音楽室に出現するという幽霊についてだ」

その瞬間、さっきまで辰兄や水島先輩に目もくれず、読書を続行していた燐の動きがピタツ、と停止した。しかし何を喋るでもなく視線は本からは動かない。

「幽霊？」

仕方ないので俺が部員を代表するように質問する。ちなみに相川はさっきのドアを開ける音で覚醒したが「あれ？先輩なんで体くつつてるんですか？」なんて寝ぼけ眼で言っていた。どんな夢見てたんだお前、怖ええよ。

「ああ、どうやら夜中になると、音楽室に女の幽霊がでるそうでな、部員が怖がるのでどうかして欲しい、というのが今回の相談内容だ」

「なんで夜中に音楽室なんかにいるんだよ」

頭に浮かんだ疑問を口に出すと、水島先輩が答えてくれた。

「来月に吹奏楽のコンクールがあるの、それで練習熱心な子は自主

的に結構遅くまで残ったりするんだけど、練習も終って帰ろうとして、忘れ物をしたことに気付いた子が音楽室に戻ったときにそこに女の人の幽霊が……」

「幽霊なんているわけじゃない」

そう言って会話に割り込んできたのは、さっきまでこちらに目も向けようとしなかった燐だ。本はいつの間にか閉じられていて、眼鏡の奥の切れ長な目をさらに睨むように細くし、水島先輩を見据えていた。

「え、ええ、私も本当かどうか分からないんだけど、部員が怖がるからいないならいいのではっきりさせたくて、幽霊なんて先生方にも相談できなくて」

水島先輩は燐の鋭い視線に少したじろいだように答えた。

「そういうことで、我ら生相部の出番という訳だ」

辰兄が剣呑になりそうな空気を変えようと、明るい声でまとめる。「夜の9時頃、音楽室に確認に行く。ただ見にくくだけだし行くのは男である俺と陣だけで行こうと思うが——」

「ハイッ！ 先輩が行くならわたしも行きますっ」

相川が元気よく参加の意思を表明する。

「俺は行きたくない」

なんで夜中まで学校に来なくてならないんだ。俺にはテレビと漫画の怠惰な生活が家で待っているんだ。

「いきましようよう、肝試しですよ」

「違えよ、幽霊がないことを確認するんだよ」

「似たようなものじゃないですか」

「違う、幽霊なんていないんだから単なる巡回だ、そんなのの為にわざわざ学校に行きたくない」

頑なに拒否する俺、そんな俺のよう子を見て相川はなにを勘違いしたのかニヤリ、と笑った。

「もしかして先輩、怖いんですか？」

「なっ——」

「幽霊が怖いから行きたくないんですか？ いやー先輩も可愛いとこあるんですね、それじゃー仕方ないですね」

相川はニヤニヤしながら言う。明らかな挑発だ。しかし男としてそんな不名誉なことを黙って認める訳にはいかない。

「……分かった、行つてやるよ」

さらば愛しの漫画とテレビ。

相川は思い通りにことが運び「イエー！ 夜デートっ！」などとはしゃいでいた。そんなよう子をジッと見ていた燐が、相川、俺を交互に見たあと静かに呟いた。

「私も行くわ」

「「えっ……」」

驚いたのは俺と辰兄。一瞬なんて言ったのか理解できなかった。

「燐、お前なんて――」

「行く、と言ったのよ」

「いや、だつてお前――」

「陣」

燐が俺の言葉の続きを発するのを遮るように静かに、しかし決して譲らないという強い意志を込めた声で言う。

「私は、行くわ」

……正直なにを考えているかは分からないが、俺にはそれ以上燐を止めることはできなかった。辰兄は俺と違い、なにかに気づいたようで「仕方ないなあ」などと笑いながら呟いている。兄妹のなせる意思疎通術であろうか、俺には全くわからなかった。

「燐先輩、可愛いですねえ」

相川も、微笑ましいものを見るように笑いながら、なんだか分かったような口を利いていた。いや、なんでお前、幼馴染の俺を差し置いて分かってんだよ。

そんなこんなで、今日は夜の学校にみんなで来ることになった。もちろん、俺は嫌な予感しかなかった。

午後9時、自宅で時間を潰し、再び学校にやってきたときには、既に校門前に生相部の部員は全員集まっていた。

「先輩、遅いですよー」

「時間ぴったしだろうが」

「女の子を待たせる時点でアウトですよ」

「お前は何時に来てたんだよ」

「え？　ずっと部室で寝てましけど」

「あれからずっと!？」

確かに俺が部室を出るとき、確かに相川は「夢の続きが気になるのでー」と言って再び寝に入っていたが、あれからずっと寝てたのか。

「というか、それならお前より早く来るなんて不可能じゃないか」

「男の子は、女の子の無茶な要求にも応えないといけないときがあるのですよ」

それは絶対今じゃない、というか物理的に不可能なのにどうしろと。しかし、突っ込み返したところでまともな答えが返ってくるとも思えなかった。

そんなことを俺が考えていると、全員集まったことを確認した辰兄が、みんなに聞こえるように声を出した。

「よし、みんな集まったからそろそろ行くか。……燐、本当に大丈夫か？」

辰兄が心配そうに燐に声を掛ける。

「何度も言ってるでしょ、大丈夫よ」

いつもと変わらぬ無表情で淡々と応える燐。しかしその顔色はいつもとより心なしに青褪めていて、普段から外に出ない燐の、日焼けの全くしていない肌は、更に白く感じられた。

「そうか……、じゃあ行くとするか」

本人がそういうなら意思を尊重したいのだろう、辰兄はそれ以上

止めようともせず、出発の号令を出すのだった。

夜の校舎は案外セキュリティはしっかりしている。

過去に俺は、夜の学校に侵入しようとしたことがある。

あのとき俺は学校に携帯ゲームを忘れて、それを取りにいったのだ。運悪く忘れたの金曜日だったというのも、俺に学校進入という一大イベントを執行させた要因の一つだった。当時ハマっていた有名狩ゲーム「モンスターパンサー」を、時間がたっぷりある土日にプレイすることができないなんてことに、当時の俺が耐え切れる訳もなく、俺は迂闊にも、自らに課した禁忌「目立つことをしない」「平和を乱すことをしない」をあっさりと破ってしまうことになる。

その禁忌を破った結果は、やはりロクなものではなかった。

あとで分かったことだが、学校には至る所に赤外線センサーが仕掛けてあるらしく、侵入者がいた場合、すぐにセキュリティ会社に通報されるようになっていっているらしい。そんなことを知らない当時の俺は、開いていた窓から侵入し、ゲームを回収して満足顔で侵入した窓の所に戻ってきたときには、既にセキュリティ会社のゴッつい人たちに囲まれていた。

制服ではなく私服で来ていたのも悪要因の一つだった。学校の生徒だと訴えるも「証拠がない」と相手にしてもらえず、教師、両親、果ては警察までやってくる大騒ぎになった。

なんとか事情を説明し、警察にも連行されることなく開放された俺だが、教師と両親には死ぬ程怒られ、やっこの思いで手にした携帯ゲームも、体育会系の父親に本体ごと叩き折られた。まさに骨折り損のくたびれもうけである。折れたのは骨ではなくゲームだったが、なんの救いにもならない。

そのとき俺は改めて思ったのだ。やはり平凡な日常から逸脱するような行為をするべきではないと。

そんな過去のトラウマを思い出しつつ、俺たちは校舎に入っ
てすぐの当直室に向かった。

そこには当直の教師がいた。細身の教師は俺達に目を向け「ど
うしたんだ」と言った。この人何の担当だっけ、なんて考えていた
ら「忘れ物をしたので取りに来ました」と燐が嘘の事情を説明する。
表向きは優等生で通っている燐の言葉に、教師はあっさり頷き「早
くしろよ」と言って校内へ入るのを許可してくれた。

ていうか、あのときの俺もこうすればよかった。あのときは取
りに来たのがゲームだったのでなんとなく後ろめたくて窓から侵入
したが、嘘をついてでこちらから侵入した方が明らかに賢かったで
あろう、俺のバカ。

無事校舎の中に入ることでできた俺たち、しかし音楽室は4階
にあり、学校の玄関からは丁度、一番遠い位置にある。しかも手元
にある灯りは当直室で借りた大型の懐中電灯のみで、その灯りは広
い学校においては心細く、ユラユラと歩く度に揺れる光も俺たちの
心を徐々に不安定にした。気分を変える為に俺は雑談をすることに
する。

「そーいや相川、夢の続きは見れたのか？」

俺は部室で出る前に相川が言ったことを思い出して聞いてみた。

あの俺がスプラッタな感じになってそうな夢だ。

「んー、残念ながら見れなかったです」

それはよかった。

「でも代わりに予知夢を見ましたよ」

「予知夢？ ああ、そーいお前、予知能力者っていう設定だったっ
け」

「設定じゃないですって。本物ですよ」

相川が怒ったように眉を上げる。しかし俺よりも相川は俺より身
長が低いので、自然見上げる形になり、残念ながらちっとも迫力が
ない。

「えーと、さっき見た夢はですねー、幽霊の正体です」

「「は？」」

相川以外の全員の声がハモる。隣でさえも歩みを止め、口をポカ
ンと開けて驚いている。

「正体って？」

「おっと喋っちゃいました。楽しみが無くなる続きは後にしまし
う。フッフ、わたしは空気の読める女なのです。ネタバレなんて無
粋な真似はしませんよ」

「いや、もうなんか十分台無しになっているから」

しかし、本当に幽霊の正体なんて分かっているのだろうか。少し
突っ込んでみよう。

「本当に幽霊の正体分かっているのか？　　というか本物の幽霊じゃな
いのか？」

「当たり前じゃないですか先輩、幽霊なんて非科学的なこと信じて
るんですか」

お前が言うな、自称予知能力者。

「なら言ってみろよ」

「だから言っちゃったらつまらないじゃないですか。でも後で言っ
てないから信じない、って言われるのも嫌ですのでこうしまし
ようか」

そう言っただけで相川がポケットから取り出したのは携帯だった。

「今から先輩の幽霊の正体を書いたメールを送ります。そして開か
ずにそのまま音楽室まで行って、幽霊の正体を確認してからメール
を開いて確認して下さい」

なるほど、そうすれば相川はあらかじめ正体が分かっていたこと
の証明になる訳か。でも。

「誰もいませんでした。ってオチじゃないだろうな」

「大丈夫ですっ。まかせて下さい」

自信満々な態度で胸を張る相川。なにをまかせればいいんだ。

そう言っただけで相川は早速メールを打ち、先日交換した俺のメールア
ドレスに送信してきた。

「まだ開けちゃ駄目ですよ。あとのお楽しみです」
釘を刺す相川。

「分かったよ」

俺は頷いたが、正直見てみたかった。が、それを振り払うように、携帯をポケットにねじ込み。音楽室への歩みを再開した。

しばらく進んでいると、俺は燐のよう子がおかしいことに気付いた。顔色がさつきより悪くなっている。やっぱりか、と思い俺は燐に声を掛ける。

「燐、大丈夫か？」

「……ええ、大丈夫よ」

全然大丈夫なようには見えない、声はもいつものような鋭さを含まず、酷く弱弱しいもので、普段からの超然とした態度からは想像できないほどだった。

「やっぱり帰るか？」

辰兄が氣遣うような声を掛けけるが、案外負けず嫌いなところがある。憐は、頑なに拒否をする。そのときだった。今向かっている音楽室の方角から、何かが倒れるよう金属音が響いてきたのは。

「ひ
い
い
い
い
い
い
い
！」

燐が普段のキャラを完全に崩壊させ、なり振り構わず叫びながら俺の腕に抱きついてきた。

「ふええええ！
じんーっ！」

目に一杯の涙を溜め、まるで子供のように俺に泣きついてくる燐、なにこれかわいい。

そういえば昔は泣き虫で、よくこうやって泣きついてきたなあ、と俺は懐かしき幼少期を思い出すが、あの頃と明らかに違うことが、俺の腕に存在した。そう、抱きつかれたことによる球体A、Bとの接触である。

球体A、Bはその豊かな包容力、弾力性を駆使して、俺の腕をまるで血圧計の如くがっちり覆っていた。しかしながら締め付けられるような感触はなく、むしろその温かさも相まって、極上の羽毛布団に包まれているような至福の感触を……。

そこで俺は我に返った。いや、返らされた。

俺は数センチ程宙に浮いていた。視界が完全に闇に包まれていた。何故？ 答えは俺は現在、辰兄にアイアンクローされているから。

「陣、お前達にこういうのはちょっと早いんじゃないか」

声は穏やかだが、手に籠る力が確実に増していた。あつ、なんか頭からピシッという音が聞こえた。

「ギブギブ！ 辰兄、死んじゃうって！」

俺は必死で解放を求めた。横から相川の「いいぞ！ もっとやれ！」という声が聞こえてくる。ちよっとお前黙れ！

3分くらい俺の頭を握力計代わりにした後、ようやく開放してくれた辰兄は隣に話掛けた。

「隣、もう平気か？」

俺は平気じゃない。

「うん……」

隣も若干落ち着いたらしく、口調は退行したままだったが、涙は止まっていた。そして俺と目が合うと、顔を若干赤くして俯いて「もう大丈夫だから」と誰ともなく呟いた。

「いやー、隣先輩怖いもの苦手なんですネ、びっくりしました」

相川が珍しいものでも見たように口にする。確かに普段のよう子からは想像できないだろう。俺も久しぶりに見た。

隣は少しムツとしたように顔を上げ、感情を抑えた声で反論した。

「私に怖いものなんてないわ」

「びっくりするほど説得力がないな」

俺が思ったことをそのまま口にする、隣は睨みつけてきた。

「陣、さっきの記憶消すから、ちょっと脳みそ出してくれる？」

「そんな気軽に出せるか」

「どうやら調子は完全に戻ったようである。あの可愛さはどこへやら。」

やっぱり燐は、無理矢理にでも置いてくればよかったな、と思いつつも、意外と大きいんだなあ、なんて考えてしまっている俺は、やはり大バカなのだろう。

「

なんやかんやありつつも、音楽室に無事到着した。

「じゃあ、開けるぞ」

辰兄が確認を取るようにみんなに声を掛ける。

俺は燐の方を見た。燐は先ほどのやりとりで落ち着いたのか、特に動揺しているよう子も見られなかった。

ガラガラ。

辰兄が音楽室のドアを開ける。中は暗く、肉眼ではなにも見ることはできなかった。俺は電気のスイッチを探り当て、スイッチを入れる。

パチッ。

灯りが付く。

音楽室を見渡すが特に変わったよう子もなく。先程聞こえた金属音の正体も分からなかった。

「音楽準備室じゃないかしら」

「ああ、そういえばそんなものがあるんだっけ」

燐が指摘した音楽準備室の方を見る。

音楽準備室は入り口とは反対側の、黒板の横のドアから入れる部屋で、教師が授業の準備をしたり、あまり使わない楽器とかを置く部屋だ。一般生徒はまず入ることのない部屋である。

「じゃあ行ってみるか」

辰兄が先導し、俺達も後に続くような形で付いていく。

「いやー、ドキドキしますねえ」

相川はこの状況を楽しんでいるようだ。

「どうせ楽器が落ちたとか、そんなオチだろ」

俺は現実的な推測をする。

「そういやここから先、お前は予知で見てるんだろう？」

まだ幽霊は出てきてないから相川が見たのはこれから先の展開の
はずだ。自称予知能力者の言うことを信じるなら、と俺は心の中で
付け足す。

「ええ、ですけどドキドキワクワクは止まりません」

なんで幽霊の正体を知っているのにドキドキするんだ？ と俺は
思いつつ、音楽準備室のドアを開け、入っていった辰兄に続いた。

音楽準備室に入り、真っ先に目に入ったのは床に落ちたシンバ
ルだった。

「やっぱりか」

思わず口に出た。

「どうやらさっきの音はこれが原因らしいな」

辰兄が言う。やはり現実なんてこんなものだろう。棚に不安定に
乗せてあったものが落ちただけだ。

「こんなことだろうと思ってたわ」

さっきまで幼児退行してたヤツがなにか言ってるが、気にしない
でおこう。

「……よっ、と」

俺は床に落ちていたシンバルを拾い上げ、棚の中ほどの場所に乗
せる。そのときシンバルの置いてある棚の、一番上の方に目が向く。

そこにあったのは箱だった。何の変哲もない木製の箱であり、
それだけなら別に注視するような特別なものではない。しかし、そ
こからはみ出していたものが異ようだった。

髪の毛だった。

「——っ!!」

俺は全力で後ずさった。

みんなも俺のよう子を見て、それに気付いたようで、各々別のリアクションをしていた。辰兄は「おおおお」とよく分からない声を上げてその場に立ってまま驚いていた。燐は音もなく失神していた。相川はニヤニヤ笑ったままだった。オイコラ。

「なななななんでお前平気なんだよ!」

「それはアレの中身を知っているからですよ」

俺だって分かるよ。はみ出してるもん。ちょうど人の頭がすっぱり入りそうな箱からはみ出してるもん。だけど冷静でなんていられるか。そういえば女の幽霊が目撃されているんだったな、アレか、アレが原因なのか?モノホンならプロ呼べよ。

相川はずっと笑ったまま俺のよう子を見ている。いや、いくらなんでもおかしくないか?

いくら相川がちよつと頭のおかしい後輩でも、死体を前に笑ってられるとは考えにくい、というかそんなサイコな後輩であって欲しくない。ということとはつまり、アレは死体ではないんじゃないか?

「おい、お前幽霊の正体知っているんだろ?」

「ええ、知ってますよ」

相川が笑顔のまま答え。音楽準備室を照らす灯りが暗いせいか、それは意味深で不気味な笑顔に見えた。

「なら、アレの中身も知ってるのか」

「もちろん」

「なんなんだ」

「それは見てのお楽しみです」

見ろというのか、アレを開けて見ろと、それは警察の仕事じゃないのか。

そう思いながらも、相川が開けることを勧めるということは多分そんなおかしなものは入っていないんだろう、と俺は意を決してソレに手を伸ばした。

「……軽いな」

箱は軽かった。とても人の頭が入っているようには思えない。俺はそれでいくらか不安も和らいだのでそのまま思い切って蓋を開けた。

「……カツラ、だな」

横から覗き込んだ辰兄が言う、そうカツラだった。長い髪のカツラと、白いワンピースのが箱の中には入っていた。

「なんでこんなものが音楽準備室に……」

ここは演劇部部室も兼ねているんだろうか、なんて俺が考えていると音楽室の入り口の方から声を掛けられた。

「何をしているんだお前達！」

どうやらさっきの当直の教師のようだ。まずい、教室に行かずにこんなところにいるのがバレたのだろう。よく考えたら音楽室は当直室から見える角度にあった。灯りなんて付けなければよかった。

「いやー先生、これはですね」

俺は適当な理由をでっち上げようと、カツラを手にしたまま教師の振り返った。

「それは……っ!？」

教師が驚愕の表情を浮かべる。ん？　なんだこのリアクションは。

「見たのか!？」

問い詰めるように近寄ってくる教師。その視線は俺の右手に注がれている。そう、このカツラだ。これのことか？

「はあ、まあ見ましたけど」

これはこの教師の私物なのだろうか。そういやこの先生音楽の教師だっけ。俺選択授業美術だから知らなかったな。

それにしてもカツラなんて、先生は薄げに悩んでいるのだろうか？　しかしこの長さの髪は……。

「頼む！ 黙っていてくれ！」

いきなり先生は土下座した。

「えっ？ 先生いきなりどうしたんですか」

大の大人にいきなり土下座されうろたえる俺、どうしたらいいのかわからず辰兄の方を見ると、辰兄は「ふむ」なんて言っただけで考えているようだった。

「先生、話を聞かせてもらえますか」

辰兄は落ち着いたよう子で先生に話し掛ける。なにがなんだかわからない俺とは違って、ある程度推測でも立てているようだ。

その冷静な辰兄の態度に影響されたのか、土下座を続けていた音楽教師は少し顔を上げ、ぽつりぽつりと話始めた。

話是要約すれば次のようなものだった。

この教師は女装が趣味だった。

元々どちらかといえば女っぽい顔立ちに細身の体格、カツラに女物の服を着れば本物の女性のように見えるらしい、まあ本人の談だが。

そんな秘密の趣味を前までは自宅のみで楽しんでいたら、それは段々とエスカレートしてきた。夜の町を歩いたり、自分を知ってる人のいない遠いところで女装をして出歩いたりした。仕舞いには夜の学校でもするようになった。夜の学び舎で女装するのはとても背徳的な興奮があったらしい、知らんがな。

で、ある日いつものように、部活で残っていた生徒が帰ったのを確認して、校内を徘徊しようと音楽準備室から出てきたそのとき、忘れ物を取りに戻ってきた生徒と鉢合わせてのた。学校という場所にワンピースを着た色白の女性は場違いで、奇妙に見えたのが幽霊と勘違いした原因だろうか。

それがこの度の幽霊騒動の結末。なんともお粗末なものである。俺達は土下座する教師に「もう二度と学校で女装しないければ誰にも言いません」と約束し、喜んでこれを了承した教師に見送られ、倒れていた燐を起し学校を後にした。今回の依頼人の水島先輩

には幽霊なんていなかったと報告しよう。

帰り道で俺は相川に話掛ける。

「で、これを相川は予知していた訳か」

「そうですよー、私はカツラを手を持ってる先輩と、土下座する先生の映像を夢で見たんですよ」

「ふーん、じゃあそろそろメール見ていいか？」

「どうぞどうぞ」と勧める相川。俺は携帯を取り出し、相川から送られたメールを開く。

正直、例えメールにあの教師が幽霊の正体って書かれていても、事前に知っていたんじゃないかと俺は疑っていた。あの教師は前から女装して町を歩き回ったりしてたらしいから、どこかで見て音楽教師に女装の趣味があると気付いていてもおかしくないからだ。

しかし、そのメールを見て、俺のそんな考えは消し飛ばされる。横から覗き込んだ辰兄や燐も驚愕の表情を浮かべ、メールの内容の凝視する。

『幽霊の正体は音楽教師、女装が趣味の変態さんでしょうか』

ここまではいい、これは予想の範囲内だ。問題は次の文章だ。

『陣先輩の横で燐先輩が倒れてました。きっと恐怖でおかしくなった陣先輩の本能が子孫を残そうとした結果、燐先輩は被害者になったものと思われます。陣先輩マジリビドー先輩』

突っ込みどころ満載だがそんなのは問題ではない。問題なのは燐が倒れていた、という文章だ。これは事前に予想できることじゃない。相川は今日まで燐が極度の怖がりなのを知らなかったはずだ。

俺達は驚きを隠せないまま、ゆっくりと相川に顔を向ける。

相川はそんな俺達の反応に満足したのか、いつもと変わらぬ笑顔で、Vサインを作って誇らしげに俺に聞いた。

「これで信じて貰えましたか？」

こいつはもしかして……。

本物の予知能力者……なのか？

シスコンとトラウマ

俺は努力というものが嫌いだ。

努力すれば報われるなんていうのは才能ある者の戯言である。代表的なものが学校の勉強である。ほとんど同じ環境の生徒が集まっているのにその学力には大きな差がある。

家で勉強したり塾に通ってるから？　なら同じように塾に通えば同じ成績になるのだろうか？　違うだろう。実際努力をした者なら分かるはずだ。自分のほうが明らかに頑張っているのに、そうでない者に負けた経験は誰しも身に覚えがあるはずだ。あるいは才能ある者はその逆、特に努力もせず勝利した経験があるだろう。

向き不向きなんていう言葉は才能という言葉に置き換えに過ぎず、自分と、周囲への言い訳に過ぎない。

俺は凡人である。特別な才能なんてありやしない。頑張っても報われない、ならないほうが楽で、傷付かない。だから努力の押し付けとも言える宿題なんぞはする必要はなく、己の才能の無さを自分で確認するというDM行為よりも、もっと有意義な時間の使い方を考えることが大事だと俺は思う。だから今日も俺は、努力をしない。

……なんてことを俺は『現実逃避日記』にしたため、満足して閉じた。

その日記の横を見ればやりかけの宿題のプリントがある。現実逃避が終了した今、現実と向き合わないといけない。

「勉強したくねえ……」

そうやって俺は机に突っ伏す。

だって分かんないんだもん。

ここは俺の自室である。マンガとゲームが友達の、俺の憩いの

空間。そんな空間で宿題しようってのが間違だった。

「そういやこれ、まだクリアしてなかったな」

次なる現実逃避に手を伸ばしかけてそのとき、部屋の扉がノックされ、直後に扉が勢いよく開いた。幼馴染のお隣さんだった。

燐はツカツカと俺の部屋に遠慮なく侵入してきて、途中にあるマンガやゲームを容赦なく踏みつけつつ（オイッ）まっすぐこちらに向かってきた。そして俺の前に立ち、ふと思い出したように口を開いた。

「入るわよ」

遅えよ。完全に入りきってるよ、むしろ入ったわ、だ。

「なんか用か」

燐がこの部屋に来るのは珍しい。家は隣同士で、小さい頃はよくお互いの家を行き来していたが、中学くらいからめっきり減っていた。辰兄の部屋にはよく行くのだが、思春期ってやつかね。

「兄さんのことなんだけど」

「辰兄？喧嘩でもしたのか」

「違うわ」

燐は一呼吸置いて続きを口にする。

「兄さんてシスコンじゃない？」

「……ああ、そうだな、なんだよ今更」

確かに辰兄はシスコンである。燐に近寄る男を見ると普段は温厚な辰兄は修羅と化す。元々身長も高く、体格もかなりいい方なので近寄ろうとした男はすぐさま逃げ出す。

燐は性格はともかく見た目は大人しそうな文学少女といった風で、知的で端正な顔立ちをしているが、その実態は体内に毒袋なる器官でも存在するのではないかという毒舌家だ。ほっといいても男は逃げ出すのではないかと俺は思うのだが。

「そろそろ兄さんのシスコンを治そうかと思って」

「病氣みたいに言うなよ」

「病氣みたいなものよ、あれは」

珍しくため息をつく燐。

「今日クラスメートの男子と掃除当番でゴミ箱と一緒に捨てにいったんだけど、そのときにその男子に告白されてね」

「……へー」

幼馴染のこうゆう話を聞くのは複雑な気分だ。兄妹のように育っただけに、そういう部分の変化は戸惑いを感じる。

「それをたまたま見た兄さんが男子につかみかかって、そのまま投げ飛ばしてゴミ箱にスポリと」

「おお、マジか」

さすがに暴力沙汰はまずいな。

「幸い、男子は怯え切ってそのまま逃亡、先生に言ったりもしないみたいんだけど」

復讐が怖いんだろうな、俺でも言わない。

「さすがにこういうのがこれからも続くのはまずいと思ったわけよ」

「確かに、辰兄ももう三年だもん」

この時期にもし停学にでもなったら洒落にならない、辰兄は進学希望だし。いや、逆に燐と同じ学校に残れることを喜ぶのだろうか、燐は絶対嫌がるだろうが。

「それで陣には協力してもらいたい訳よ」

「協力ってなんだよ」

「一芝居打とうと思ってね」

その後、燐から計画の内容を聞かされて俺は、早くも逃げ出した気分になった。

「兄さん、話があるの」

場所は部室、いつものように相談依頼人を探しに行こうと立ち上がった辰兄を燐は呼び止めた。ちなみに今日は相川は大事な用事が

あるとかでさっさと帰ってしまった。

「なんだ？ 燐」

辰兄が振り返る。俺はこれから起こるであろう修羅場に内心胸をドキドキさせながらそれを見ていた。正直今からでも逃げ出したい。

「私、陣と付き合うことにしたわ」

ピシッ、と時間の止まる音が確かに聞こえた。

辰兄がなんか真っ白になって停止している。いつそ俺も真っ白になりたい。

「私達もうラブラブで、もういくとこまでいっちゃってるの」

ピシピシッ。辰兄の体にビビが入っていくのが見えるっ。むしろ辰兄が逝っちゃいそうな勢いだ。

「○○○とかは勿論だし、△△△△△とかもしてるし、□□□□ま
でしてるディープな関係なの」

サラサラア。やめろ燐！ 辰兄がついに粉になって風に流され始めた。ていうかなんだが俺も顔から火が出るように恥ずかしいっ。平気な顔してそんなこと口にすんなっ。

「ホントウナノカ、ジン……」

辰兄が鈍い音を立てながら首だけこちらに向ける。よせ、首もげちゃうって。

「……ああ、まあな」

俺は嘘をつく。これは燐が計画した通りの段取りだ。

燐は辰兄のシスコンを治そうと、ある計画を立てた。それは荒療治と言う他ない方法だった。計画は以下の通りだ。

- ・ 燐が辰兄に俺と付き合ってることを報告する。
- ・ 辰兄シヨックを受ける。
- ・ 辰兄キレル。
- ・ 俺を殴る。

- ・それでもめげない俺。
 - ・また殴られる。
 - ・辰兄は諦めない俺の姿に感銘を受け、交際を認める。
 - ・妹の交際を認めたことでひとつ大人になる辰兄。
 - ・それを見届け、ネタバラシ。
 - ・嘘をついたことに怒り、俺を殴る辰兄。
- 完。

……大丈夫かこれ、俺が少なくとも3回以上殴られているのが気になる、人を片手で持ち上げる辰兄に3回も殴られたら俺死んじやうぞ。適当過ぎる計画じゃないか？ 学年トップが考える計画じゃないだろ。

「……そうか」

辰兄は諦めたように溜息をつき、ぽつりと呟いた。

おっ、これはもしかして殴らずに交際を認めるパターンか？

だとしたら有難い。無用な傷は負いたくないものな。騙すの心苦しいが、後で誠意を込めて謝罪するでしょう。

「陣、今まで楽しかったよ」

「なんでそんな別れの言葉みたいなのを口にする！？」

殺られるのか、俺は殺られるのかっ。

「ハハハ……冗談だ」

辰兄は乾いた笑みを浮かべた後、そう言った。俺の寿命は少し伸びたようである。

「陣、お前のことは兄弟同然に思っている」

「……ああ、俺もだよ」

ああ、心がズキズキするっ。罪悪感が俺を締め付ける。

「お前になら憐を任せてもいいかもしれないな」

ドグン――。

心臓が、鈍く鼓動する音がした。

「思えばお前達昔から仲が良かった。こうなることは俺も分かったのかもしれないな」

ドグン……。落ち着け。落ち着け俺。これは芝居だ。後で嘘でした、って言うんだから大丈夫だ。

「幼馴染のお前は燐を誰よりも理解してくれているしな」

この程度のことはあらかじめ想定していた筈だろ。なんで今更ビビってるんだ。

しかし、俺の鼓動はどんどん早く、しかし、その一回一回が俺を心臓の奥を鈍く打ち付け続ける。

「陣、俺はお前のこと誰よりも信用している」

やめろ。俺に期待なんてするな……！

「しかし、これだけは約束して欲しい」

やめろ。俺は約束なんて、責任を背負うなんて無理なんだ。あんたは知っているだろう！？

心臓は相変わらず、息苦しいくらいに動き続ける。

そして、ついに辰兄は決定的な言葉を口にした。

「燐を絶対幸せにすると」

「やめろおおおおー！！」

俺は叫んだ。

自分でも驚くぐらいの声量に、辰兄はもちろん、燐さえも驚いた顔をしている。

二人は俺を見ていた。

俺を、責任を拒否した俺を。

芝居とはいえ、こんな大声で拒否された燐は傷ついているだろう。

本気だと思っている辰兄なら尚更だ。

そう考えると俺を二人の顔を見ることができず、俯いてそのま

ま出口に向かって走り出した。

「おいっ！ 待て陣！」

待てるか、こんまぐちゃぐちゃの心のまま、二人と向かい合うなんてとてもできない。

「陣っ！」

燐も俺を引きとめようとする。俺は振り向かず、部室のドアを開け、飛び出した。

いや。また、逃げ出したのだ。

少し俺の昔話をしよう。

なに、なんてことはない。ありふれた話だ。

俺は昔、とある少年野球団に所属していた。

父親が大の野球好きで、少年野球団も父親の勧めで入った。俺も父親の影響で野球中継などでよく見ていたので、入るところには何の不満もなかった。

残念ながら才能は無く、試合で出る機会ほとんど無かったが、俺は必死に努力した。朝は学校に出る2時間前に起き素振りをして、学校から帰ってすぐに練習に出る毎日を繰り返した。

そして俺が小学5年生のときに、ある出来事が起こる。

その日、俺は練習試合で逆転ホームランを打った。病欠したレギュラーメンバーの穴埋めで出ていただけだったので、誰も期待していないかっただけに周囲の反応は凄まじいものだった。みんなが俺を良くやったと褒めた。

なまじ俺も努力をしていただけに、ついに自分の努力が実ったんだと思った。しかし、それは今思えば勘違いで、相手がいつも補欠の俺を舐めきっていたのとか、それがたまたまバットに当たり風向きが良かったので場外まで流されたとか、そういう小さい偶然の積み重ねが起した奇跡だったのだろう。まあ少しくらいは努力の成果、というのも否定できないが、あのとき俺がこれは自分の力で

と思い込み、自身の力を信じたのは間違いなく驕りだった。

周囲のみんなも俺の努力を知っていた。俺が誰よりも練習をしていただけに、手放しで俺が打ったのを喜んでくれた。本当にいいチームメイト達である。監督も沢山褒めてくれた。

更に調子に乗った俺は監督に「次の公式試合出させてください！」と頼んだ。勝ち試合の後でテンションの上がっていた監督は快諾してくれた。

ここからが俺のトラウマの始まりである。

公式試合の日、父親は親戚を集められるだけ集めて応援に来てくれた。野球好きの父親にとっては、自分の息子がスタメンで公式試合に出るこの日は待ち望んだものだった。監督やチームメイトも俺に期待しているのが分かった。俺も周囲の期待に答えるべくやる気は充分だった。

しかし、所詮は実力のバッターに期待は応える力はなかった。

俺は打順が回ってきてても全て空振り三振で終わった。しかし、野球はヒットよりもアウトになる比率が多いスポーツである。みんなは「ドンマイ、ドンマイ」と言ってくれたが、俺は焦っていた。

親戚一同が俺の応援来てくれてたのも、少なからず俺にプレッシャーを与えていたのだろう。そして、おれは遂に致命的な失敗をする。

平凡なフライだった。野球やっている奴ならアホでも取れるような球だ。もちろん俺でも取れる。しかし、そのときの俺の精神状態は普通ではなかった。8回裏、点差はこちらが一点優勢、満塁スリーアウトの状態だった。

取らなきゃ、取らなきゃ。ガチガチに緊張した俺は、必死に自分に言い聞かせる。だが、そんな状態でまともな捕球などできるはずもなく、球は俺のグローブの中で一回バウンドした後、地面へとこぼれていった。頭の中が真っ白になった俺は、落ちたボールを取ることができず、ただ突っ立っていた。

チームメイトの「オイ！早く拾え！」という声にも反応できず、結局は近くにいたチームメイトが球を拾いにこっちまで走って

きたが、そのときには既に打った選手は三塁まで回り、とつくに逆転されていた。

次のバッターが三振し、俺がベンチに戻ると、さすがにチームメイトたちの視線は若干冷ややかに感じられた。当然だ。ただのエラーならともかく、その後も動こうとしなかったのだから。

父親の方を見ることはできなかった。とてもそんな気分にはなれない。どんな顔をしていようと間違いなく俺は心に傷を負っただろう。

そして俺は、トイレに行く振りをして、試合から逃げ出した。責任も、期待も捨てて、逃げ出したんだ。

その結果、俺はチームメイトに顔を合わすこともなく野球団を辞め、父親は俺に気を遣ってか野球の話をしなくなった。野球中継も見なくなった。一度も俺に逃げたことを責めなかったのが、逆に辛かった。きっと自分が野球を勧めたことに責任を感じているのかも知れない。悪いのは逃げ出した俺なのにな。

これが俺のトラウマの話。どこにでもある。ごくごく普通の苦しい思い出だ。

しかしこのことは、今を俺を形成する重要なパーツとなっている。人は得てして、失敗からしか学ばない生き物なのだ。下手に成功なんてすれば今の話の通り、自身の過剰な評価に繋がりがねない。だから俺はそれから、極力人に期待を抱かせないように生きてきた。責任を背負うのを拒否し続けた。それが今の、自由に身軽な、空っぽの俺である。

辰兄から逃げ出した俺は、赤い鉄橋の上に来ていた。

ここはあるとき、野球試合から逃げ出した俺が辿り着いた先でもある。思い出しながら走っていたから無意識に來たのだろうか。

いつの間にか夕日が傾き始めていた。夕日は橋の下の小川を鮮やかに赤く染め、とても綺麗に見えた。

俺はしばらくこの川でも見て落ち着こうと、橋の上にゆっくり歩いていく。橋の周りに人影は見えない。元々大通りから外れた場所である。特になにがあるでもないここには人もわざわざやってくるのだろう。いや、しばらく歩くとそこには先客がいることが分かった。

相川である。

相川は手すり肘を付き、川を眺めていた。いつも笑っている印象のある相川だが、そのときは一切の笑みを浮かべず、ただ真剣な顔で川を見ていた。

こいつ、真面目な顔したらこんな美人なんだな、と俺は相川の横顔を見ながら思った。相川が聞いたらどんなリアクションするのだろうか、普段も美人だと怒るのか、調子に乗るのか、あるいは照れるのか。

俺は声を掛けずに去るのもなんなので、近寄ることにした。

「用事があるんじゃないかったのか」

俺はできるだけ平静を装って声を掛けた。相川には気を遣わせたくない。

「先輩、こんにちわ」

俺に気付いた相川がいつも通りの笑顔でこちらを向き、挨拶する。

「今日はおはようございます、じゃないんだな」

「あれは部活ですからね、今日はプライベートです。遂に先輩と学校外で会う深い仲になってしまったね」

「偶然だろうが」

「いえいえ、必然です」

相川がいつか見た含みを持った笑みを浮かべる。ああ、このパターンは。

「予知夢、ってやつか」

「フッフ、さすが先輩」

相川は手で小さく丸を作って正解、と言った。

予知夢の力は前の幽霊騒動で見せ付けられているので、俺がこ

ここに来るのくらい分かって納得だ。

「先輩のここに来るのは予知済みです。待ち伏せいたしました」

「ストーカー垂涎のスキルだな」

「愛の力と呼んで下さい」

都合のいい言葉だ。だが、こいつと話していると少し、落ち着く。

「で、これがお前の用事なのか」

「はい」

そこで一旦相川は笑顔を納め、真摯な眼差しでこちらを見つめた。

「大切な、用事です」

そして元の笑顔にパツ、と戻る。

「とりあえず、お話でもしましょうか」

「……そうだな」

俺は相川同よう手すりに肘を付き、川を眺めながら喋ることにした。

「わたし、昔先輩にここで会ったことあるんですよ？」

「え、本当か？」

さっぱり覚えてない。そもそも俺はここに来たことはあまりない。

来たのはそう、あの野球試合のときくらい………あつ。

「もしかして、あの溺れてた子か？」

「覚えてましたかっ？」

相川が嬉しそうに顔を綻ばせる。それはいつもの笑顔とは違う、大切なものを掬い上げるような、嬉しさが顔から溢れ出るような優しい笑顔だった。

そうだ。と俺は思い出す。確かに俺はここで、あの日、溺れている女の子を助けたことがある。鉄橋の下に隠れるように逃げ込んで、泣いていた俺の目の前に、女の子が川から落ちてきたのだ。

「あれ、お前だったのか」

「はい、可愛らしいお年頃のわたしです」

「よく覚えてないけど、印象が違う気がするな」

「もう6年くらい前ですしね、あの頃は髪長かったですしね」

相川はそう言いながら、自分の髪を摘み上げる。サラサラのショートヘアが夕日に照らされ、キラキラと輝いていた。

「でも今まで全然気付いてくれなかったの、実はショックだったんですよ」

頬を膨らませ、怒ったように言う。

「過去は振り返らない性分だからな」

俺は無理やりかっこつけるが、ただ単にあの日のことは、思い出したくもなかっただけだった。実際相川に言われなければ、俺は相川をあのとときの女の子と結びつけることはできなかっただろう。

「ま、気付いてくれたので許します」

笑顔になる相川。コロコロ表情の変わる奴だ。

「先輩、野球辞めたんですか？」

突然、話を変えてくる相川。俺は心臓の鼓動が若干早まるのを感じたが、努めて顔には出さず答える。

「ああ、なんで知ってるんだ？」

「だってあのととき、先輩野球のユニフォームを着てたじゃないですか」

ああ、あのとときは着替えもせず逃げてきたから。だからか。

「わたし、あの後お礼をしようと思って地元の野球団や野球部を探したんですけど、全然見つからなかったんですよ」

「そのときにはもう辞めてたからな」

「なんで辞めちゃったんですか？」

「……………」

どう答えようか。適当な嘘でごまかすか？

相川はじっと俺の答えを待っている。いつの間にか顔からは笑顔が消え、先程の真摯な眼差しが俺の目に注がれている。

……こいつなら、話していいか。

「……少し、長くなるけど、いいか？」

「はい」

即答する相川。そんなに面白い話ではないけどな、と思いながら

も俺は拒否されなかったことに少し安堵した。

そこから俺は相川に、野球をやっていた頃の話をした。もう今更隠すつもりもなかったので、逃げたこと、思い出さないようにしてたこと、責任から逃げて生きてきたこと、全部話した。

相川はいつものように茶化したりはせず、最後まで黙って、真剣に聞いてくれた。

話し終わった後、なんだか俺は情けない気持ちになる。なんで俺は後輩の女子にこんなことを話しているのだろう。

相川は話を聞き終わっても黙ったまま中空を見つめていた。俺の話に呆れているのかもしれない。なんて情けない男だ、と。

俺も喋り疲れたので黙って川を見ていると、不意に相川が口を開いた。

「でも、先輩はわたしを救ってくれました」

「……………え？」

俺は相川の方を見る。相川は変わらず中空を見つめたまま喋りつづける。空を見ているのだろうか。

「先輩がもし、逃げ出さなかったら。わたしは今、生きていなかったでしょう」

「それは……」

違う、とは言えなかった。確かに、あのとき、相川が溺れたとき、あそこには俺しかいなかった。しかし、逃げ出したことを肯定するなんて俺にはできなかった。

「だから私は先輩に救われたんです」

「救われたって、大袈裟な」

「いえ」

相川は手すりに足をかけ。

「大袈裟なんかじゃありません」

トンッという軽い音を立てて登った。

「おい！危ないぞ」

ここから川までは10メートルくらいの高さがある。もし浅いと

ころに飛び込んだら死ぬかもしれない高さだ。

「あのとき、確かに私は救われたんです」

カン、カント、両手を広げた状態でバランスを取り、手すりを歩いていく。その足元は非常に危なげだか当の相川になんてことはなような顔で、平均台を渡るくらいの気軽さで渡っていく。

「あのときは、ありがとうございました」

「そんなのはいいから！ 早くこっちに来い！」

足を止め、こちらを向き、両手をそろえた状態でゆっくり頭を下げる相川。バランスを取っていた両手が失われたせいでゆっくりと、後ろに傾く。

「相川っ！」

「だから今度は私が助ける番です」

そう言って相川は再び両手を広げた。そこからの景色はスローモーションだった。

バランスはもう致命的に後ろに傾き、当然修正などでできず、しようともせず、そのまま両手も、体も伸ばした状態で相川はゆっくりと倒れていった。

細く、短い髪は風に煽られ僅かに揺れていて、まるで水面みなもの如く光を反射していた。

表情はとても穏やかで、普段からは想像できなほど、大人びた微笑みでこちらを見つめている。

その間も、体は確実に後ろに傾いていき、ついに90度を超えるかというとき、急速に時間が戻った。そして――。

相川は川に落ちた。

高い、高い水柱があのと時のように上がっていた。俺は終始この目で見ていたにもかかわらず、目の前で起きた光景が信じられなくて、しばらく呆然としていた。

数瞬後、冷水をかけられたように我に返った俺は、弾かれるよ

うにして手すりから身を乗り出し、相川の落ちた場所を見つめた。
相川が落下した場所は、勢いよく落ちたせいで水面は激しく乱れており、まだ水中に沈んでいると思われる相川の姿は確認できなかった。

ドグン――。

心臓からまた、鈍い音が聞こえた。

周りを見る、まるであの日を再現するかのように人は一人もおらず、俺だけが橋の上から相川の落ちた川を見ていた。

ドクン、ドクン――。

心臓の鼓動はどんどん速度を増し、鈍い痛みと共に俺に焦燥感を与えていた。

相川が落ちてから20秒は経つ、しかし相川の姿は一向に確認できず、水面もまだ乱れたままだった。

手が震えていた。足もいつの間にかガクガクと面白いくらいに笑っていた。

相川はまだ上がってこない。無事ならとくに上がってきてもおかしくない時間が経った。

「相川っ！」

相川が何をしたいか分からない、何故アイツは飛び込んだんだ？
分からない……が、このままでは死んでしまうのは確かだ。それは、俺にとってなによりの恐怖だ。人の死なんて、俺には重過ぎる。

俺は手すりに手を掛ける。手は依然震えたままだ。

今度は足を掛ける。足だって振動が止まらない。今からすることを考えたら当然だ。

手すりに登る。正直今すぐ降りたい。でも、降りるべきは逆方向だ。

俺は川を見据える。オーケー、覚悟は決まった。

俺は、飛んだ

落下はあっという間だった。

気が付けば体中に激しい衝撃を感じ、水中にいた。

方角が分からない。上も下も分からない。

体中が痛む中、目を開けると、目の前にいた相川と目が合った。

水泳の時間に子供がするように、鼻をつまみ、潜水している。

なにやってんだお前、俺が決死の思いでダイブしたのにお前は体育気分か。

息が苦しくなってきたので水面に上がる。相川も同じタイミングで出る。

「――プハアッ！ あー、死ぬかと思いましたよ」

「はぁ、はぁ、うるせえ……バカ……」

俺だって死ぬかと思ったよ。お前が。

「なんでお前こんなことしてんだよ……」

「いや、ちょっと童心に帰ろうかと思いました」

「もう少しで土に還るところだったぞ」

落ちたのは川だけだな。

「あのときの気持ちに戻りたいなー、なんて思ったんですよ」

「あのときって？」

「先輩に助けられたとき、ですよ」

「……………」

正直、俺にはなんでここまで相川が、あのときのことを大切にしているのか分からない。確かにあのとき俺は相川を助けたが、そんな何年も覚えているようなことなのだろうか。

「先輩、とりあえず岸に上がりましょうか」

「ああ」

俺達は岸に転がるように上がり込み、そのまま大の字で横になった。

まだ5月の始めである。温暖なこの地方でも、さすがに川は冷たかった。降り注ぐ夕日が俺達をじんわりと暖めていた。

「先輩、今度はわたしの昔話聞いてもらっていいですか？」

相川は寝転がったまま呟く。

「……ああ、ちゃんとオチはつけろよ」

「さっき落ちたからいいじゃないですか。まだオチろというんですか。笑いに貪欲な関西人ですか」

「だれが関西人やねん」

「わざとですか、わざとでしょう先輩」

「わかった」

本当に。いっそ人生もオチがつけばいいのにな。チャンチャン、つてな。しかしながら、現実は今も悪くも終わらないものだ。

「じゃあ、オチなんてなくていいから、話してみろ」

「……はい」

相川は、静かに話始めた。

「私は小学生の頃とても内気な子でした」

「今から想像できないな」

「そうですね、今とは全然ちがいます」

俺の言葉に相川は笑った。

「私は先輩に助けてもらってから変わりましたからね」

「俺が？」

なんでそこで俺が出てくる、俺は溺れてるのを助けただけだ。

「当時、田舎の学校から転校してきたばかりの私はいじめを受けていました」

「——っ！」

「元々内気な性格のせいもありますが、決定的だったのは予知夢でした。クラスでちょっと仲良くなった子について話したら、次の日にはクラス全体に広がってました。未来が見えるなんて言う不気味な転校生がいじめられるまでは、あっという間です」

「……………」

「ある日学校に行くのが嫌で、学校をサボりました。行くところもないので、前日夢で見たあの橋のところで、ぼんやりと川を見ていました。そしたらふと、思ったんです。」

相川は一呼吸置いて、続きの言葉を口にする。

「死んじゃおうかな、と」

と、言った。

「……………」

「子供は単純ですね。そのときは本当にそれがいいと思ってたんです。予知夢なんていらぬ、学校に行ってもいじめられるだけ、親には心配かけるから言えない。死ぬしかない、と」

自嘲ぎみの笑う相川。

「そう決めたら行動は早いもので、さっきのように手すりに登り、飛び降りました。そして意識が途切れます」

あの溺れたときか……。

「気がついたら先輩が私にキスしてました」

「なんだって!？」

いきなりラブシーンに変わった!？

「口から送られてる空気ですぐに人工呼吸だと分かりましたが」

俺、人工呼吸までしてたのか。あのときは必死だったからな。きつとテレビとかで見たやつを見よう見真似でやったのだろう。

「私が意識が戻ったことに気づいた先輩はすぐに口を離し、尻餅をつくような格好で地面に座ったあと、大声で泣きだしました」

……俺は、だんだんとそのことを思いだしていた。

「わたしはなんで助けた人が泣いているのだろうと不思議に思いました」

そうだ、確かに俺は泣いていた。あのとき安心したんだ。

あのとき、あの娘が落ちるのを見たのは俺だけだった。

俺が助けないとあの娘は死んでしまうと思った。

死んだら自分のせいだと。

試合から逃げ出して、チームメイトや両親に迷惑をかけたくらいで、死にたくなるくらい後悔している自分が、人の死なんて背負えるはずがない。そう思った。さっきの俺と同じだ。

だから、助けた。自分の心がこれ以上傷付かない為に。

「だけどその顔をみていたら私もなんだか涙が出てきました。ああ、こうすればよかったんだな、と分かりました」

確かにあのとき彼女は泣いていた。俺はてっきり溺れたことが怖かったんだと思っていたが。

「二人して大声で散々泣いた後、わたしはとてもすっきりした気持ちになったんです。そしてわたしは予知夢に感謝しました。ここに来ることを教えてくれたのは予知夢でしたから」

相川は笑う。子供の頃はできなかったであろう、明るい笑顔だ。

「もちろんあんな素敵な体験をさせてくれた先輩にも感謝しました。あのとき、わたしは先輩に命だけじゃなく、心まで救われたんです」

「違う……、相川違うんだ」

俺は命を救おうなんてそんな大層な気持ちでお前を助けたんじゃない。

「本当に、ありがとうございました」

再び頭を下げる相川。

「やめてくれ……」

俺はただ怖かっただけだ。また責任を果たせないで、罪悪感を引

きずるのが。あのとき、もし自分以外の誰かがいたならば、俺は間違はなくそいつに全てを押し付けて逃げ出していた。

「あのときから世界が変わって見えました。大嫌いだった予知夢はわたしに、幸福を教えてくれるものだと分かりました」

やめろ――。

「そうすればあのいじめられた日々も、夢を見るのがいやで、布団のなかでずっと朝まで起きていた夜も、この日の為にあったんだと思うことができました」

やめてくれ――。

「今までの嫌な思いは無駄じゃなかったんだと」

「やめてくれっ!!」

俺は堪え切れずに起き上がり、叫んだ。

「違うんだ！俺は自分の為にやっただけなんだ！お前のことなんてちつとも考えてやしなかった！」

血を吐くような思いで叫ぶ。

俺は相川のいうような人間じゃない。酷く弱く、逃げ出せばかりの身勝手な人間だ。人を救えるような人間なんかじゃない。

「それでも先輩は私の恩人です」

「――っ！」

「あのときのことは私の一番大切な思い出です。それは先輩の話を聞いたあとでも変わりません」

「……………」

「先輩は確かに逃げたのかもしれませんが。それでもその努力までも無駄なんて言わないで下さい。あのとき先輩が日々練習をしていたから今の先輩があるんです」

「だけど俺はチームメイト達に、父親に迷惑を掛けた！あいつらは俺を責めなかった！けど……だからこそ、俺が自分の失敗を許す訳にはいかないんだ！」

「いいじゃないですか、失敗したって。失敗は成功の母と言います。失敗あったの成功なんですよ。失敗は次の成功につなげて初めて価

値が生まれるものです」

「それでも俺は失敗なんて……っ！、みんなの期待を裏切るなんて真似はもうしたくないんだ！ あんな思いをする位なら俺は成功なんていらない！」

だから俺はあれ以来期待なんてされないように軽薄に生きてきた。責任を背負う前に拒否し続けてきたんだ。

「先輩、わたし先輩のこと好きなんですよ」

「な……っ！ なんだよいきなり」

「いきなりじゃないでしょう、わたしは常にアピールしてきたじゃないですか」

「けどなんで今そんな話……」

「先輩はまともに取り合ってくれたことはありませんでしたね。それも責任を、期待を裏切るのが嫌だからなんですか？」

「……………」

そうだ。俺はだから相川の好意を適当にはぐらかしてきた。恋愛なんてのは付き合っても理想と現実に差が、相手の期待している幻想を壊すことになるだろうし、断っても「付き合えかも」という期待を裏切ることになる。だから俺は誤魔化し続けてきた。

「でも先輩、それこそ無責任じゃないですか」

「無責任……だと？」

「はい、無責任です」

相川は繰り返す。

「目の前に既にある期待を、叶えもせず、裏切りもしないで見ない振りをしていることが、無責任でなくてなんなんだというんですか。わたしはそんな無責任な先輩にがっかりです」

両手を顔の位置くらいまで上げ、わざとらしく『がっかり』を表現する相川。

「けどそれはわたしが勝手に抱いていた期待です。わたしの期待はわたしのものです。先輩が責任を感じる必要なんてないんですよ。実際、わたしの先輩に対する思いは変わってないですし、むしろ日

々新たな情報を知る度に好きになってます。それが良くても、悪くても」

「……なんで、なんだ？」

「ん？ なにがですか？」

「なんでお前は俺が好きなんだ？」

ずっと疑問だった。相川の俺に対する好意は不自然だ。溺れたのを助けたからだとしても、6年も想ってるのは異常だとは思えない。

「言ったじゃないですか、あのときわたしは変わったんですよ」

相川は目を瞑り、昔の記憶を丁寧に掘り起こすようにゆっくり喋る。

「あのときからわたしの価値観、性格、人生は全て変わりました。そう、わたしにとって世界の全てが変わったんです。そのきっかけである先輩を好きになることの、どこが変わったっていうんですか」

「だか俺は実際は溺れてるのを助けただけだ。そんな価値観を変えるなんて大層なことをした覚えはない」

「あの人工呼吸ですよ」

「人工呼吸？」

意外な単語に復唱する。

「はい、不思議な話ですが、あのとき先輩の息がわたしのなかに入ってくるとき、先輩の感情も一緒に入って気がするんです。焦り、悲しみ、自分に対する怒り。その激しい感情は死ぬつもりだったわたしの心に強い刺激を与えました。感情の起伏に乏しい当時のわたしには新鮮な感情でした。だからわたしはその後、思いっきり泣くことができたんです」

「そんな、バカな……」

人工呼吸なんてそれ以上でも以下でもない。そんなことあるはずがない。

「ウソじゃありませんよ。証明してあげます」

「証明って」

「こうするんです」

そう言うと相川は突然、俺の肩を押さえ、乗りかかろうとする。完全に油断してた俺はあっさりとマウントポジションを奪われる。

相川の熱いぐらいの体温が、濡れた服越しに伝わってくる。細い髪を伝って俺の胸に落ちてくる雫は冷たく、相川の温かさを強調し、腰の上に乗る体の柔らかさが否応なしに異性を意識させる。

「今度はわたしの番です」

そう言って相川はゆっくりと顔を近づける。

俺は逃げない。いや、逃げようともせず相川の顔に見入っていた。

こうして改めて見れば本当に綺麗な顔だ。細い髪、大きな目、小さな唇。その顔が俺に近づいてくる。

そして俺達は唇を合わせた。

「——んっ」

舌で唇がゆっくり開かれていって、暖かい空気が送られてきた。

人工呼吸。

相川の吐いた息が、少しずつ体内に満たされていくのを感じる。

さっきまで川の中にいたはずなのに、相川の吐く息は不思議な程熱く、肺が焼けるんじゃないか錯覚する程、急速に、冷え切った俺の体を暖めていった。

それと同時に、ある感情も入ってきた。

それは言葉でうまく表せないがとても温かく、冷え切った心の内側が、じんわりと熱を帯びていくのが分かった。

そしてゆっくりと、唾液が糸を引きながら、唇が離れていく。

「これが、先輩を救う為の、人工呼吸です」

とても真面目な顔をして、相川は言った。眉根を寄せ、必要以上に真面目さを出そうとしている感すらある。

その顔をずっと見ていると俺のなかにある感情が渦巻いたが、俺はそれを必死に押し殺し、相川を見つめ返す。

「……………」

「……………」

互いに見つめ合い、しばしの沈黙の後。

「————ぷっ!!」

2人同時に吹き出した。

「ハハハハハハっ!」

俺達は腹を抱えて転げ回る。我慢しようと思ってもできなかった。
「いやー、さすがにちよつとクサかったですかね」
相川は目に涙を溜め、必死でそれを拭っている。

「さすがにな、人工呼吸はちよつとな」

俺も滲み出る涙が押さえ切れない、あー、おかしいとこんなに涙
って出るものなんだな。そういや本気で笑ったのなんて随分久しぶ
りな気がする。

「ひどいですよ先輩、あれはシリアスなシーンなんですよ」

「そういうお前だって笑ってんじゃないか」

「いやー、だって先輩、わたし達こんなところでずぶ濡れになっ
てなやってんだろうと思って」

「それをお前が言うのかよ」

俺達は笑いながら喋り続ける。さっきまでの暗い気持ちは嘘のよ
うに晴れていた。さっきの人工呼吸のおかげだろうか。自分のなか
のなにかが変わったのを感じる。

「先輩、こんなことをするのってもう普通の先輩後輩じゃないん
とちゃうんですよ」

「まあ普通は一緒に川に飛びこんだりはしないよな」

「だからもう恋人、いや婚約者なんじゃないですかね」

「それはない」

「あー、ほんと先輩はノリ悪いですね、そこはそうだな、って言っ
ちやうとこでしょ」

「なんとでも言え、辰兄も言っていただろ。いきなり恋人とか婚約

は非常識だって

俺は笑いながら、上を見ながら喋る。

「だから、まずはお友達からだ」

相川が首だけでこっちを向く。俺も相川を見つめる。

「そうですね」

にっこりと、いつも明るい笑顔を浮かべる。

お互いの右手と左手が、相手に向かって伸びていく。

手はちょうど二人の中間で手を繋ぐ形で結ばれる。

今日、俺は、俺が救って。

俺を救ってくれた後輩と。

「これからもよろしくお願ひしますね。陣先輩」

「ああ、よろしくな。美月」

友達になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3507w/>

夢見る少女と凡人

2011年10月9日15時55分発行